

炎のもとで

しんしんと降る雪は、絹のような闇で舞い続けた。風は凍てつき、花は硬く身を締め、虫や獣は、土深くまで逃げ込んだ。

そんな中、魔導師の木の最上階、魔導師長の部屋では、期待の熱が生まれていた。

魔導師ノウアの顔は、赤く燃えていた。彼女は、さかさまになった瓶の口から、真っ赤な液体が雫となって落ちてくるのを眺めていたのだ。

魔導師の机の上には、温められでぬったりとなった〈虹の猫〉の涙と、腹を切られた蟬の死骸があった。死骸からは、細い管が伸び、逆さの瓶へ、ぽたぽたと朱色の油を落としていた。油は、真ん中で溜まった虹の猫の涙と融合し、さらに紅となって、ノウアの前で落ちた。じゅううっと、下の受け瓶の中で咆哮する。

ノウアは、急いで蓋をした。

「〈見えない死〉の解呪法を完成させたのですか!？」

真夜中、魔導師の訪問を受け、雪まみれの彼女を中に入れたクレアナダ長は、

その報告に驚愕した。

「ええ。ですが、まだ言いきれません。それを確証したいがために、あたしは、いまから実験をしたいのです」

ノウアは、神妙に言った。

「でも、なぜ、そんな早くに完成できたのです。……いいえ、もちろん、あなた様が術の作成に才能をお持ちなのは承知の上です。ですが、まだ発見からそれほど日が経っていないのですよ？」

「影の人が味方してくれたと言っていていいでしょう。影の人は、あたしを〈虹の猫〉に会わせ、さらにそいつの涙までも、あたしにくれたのです」

クレアナダ長は、安堵と厳かな気持ちで胸が詰まり、「ありがたきお導き。感謝いたします」と、目を伏せて言った。

「ことは一刻を争う。この機会、無駄にしないよう、すぐにはじめなければ」

「ええ。ヨウスの畑へ向かいましょう」

彼女たちの希望の思いは、またたくまに管理塔へ広がり、ヨウスの畑へ出発するときには、雪降る夜にも関わらず、多くの自然の人たちが、松明を掲げて、魔導師と長の後ろに続いた。〈見えない死〉の死をこの目で見ようと、彼らは胸を高鳴らせていた。

「ヨウス、ヨウス！」

魔導師たちがつく前に、自然の人の〈耕しの者〉たちが、家の扉を叩いた。出てきたヨウスと、彼の仲間たちは、雪夜に浮かぶたくさんさんの松明と、先頭にたたずむ魔導師、そしてクレアナダ長おさのすつくとした姿を見て、はだけた寝巻を急いで直した。

「ヨウス、あなたの畑の呪いを、解けるかどうか試しに来た！」

魔導師ノウアは、声高に言った。彼女は、肩掛け鞆から、真っ赤に光る瓶を取り出した。

「〈精製炎せいせいえん〉だ！ これで〈見えない死〉をとめてみよう！」

自然の人たちは、歓声を上げた。松明が喜びで跳ねる。ヨウスは、体中に血が駆け巡るのを感じた。あのおどろおどろしい、哀しみの畑が、ついに息を吹き返すのだ。彼は、すぐさま外套を羽織ると、雪の中へ飛び出した。



英知の象徴ロウリの花を模った彫り物が、矢切りからドナウトを見下ろしていた。雪を免れたその白いロウリは、闇の中で死に顔のように浮かんで見えた。ドナウトは、背後を振り返った。だれもいない。彼は、音をたてないように門を開けると、自宅へ入った。

延びる墨色の廊下。突き当りの戸には、ひし形の小窓がある。ドナウトは、息をひそめて一步踏み出した。床板が呻きを上げる。肩から雪片が落ちる。雪のひとひらは、板と板の間に、ゆっくりと染み込んでいった。

白く吐き出される息を押しとどめ、突き当りにたどり着くと、ドナウトは中へ入った。

すると、後ろで勝手に扉が閉まった。

「ドナウト、ドナウト。ここへ来たのは、〈野^の駆^かけ〉の指示なの？」

扉の傍に、誰かがいた。

大きな帽子を被った、小柄なアベドだった。

ドナウトは、ゆっくり退いて、間合いを取った。

「不法侵入はどうかと思うがね。……名前を尋ねても？」ドナウトは、影に向かって、努めて冷静に訊ねた。

「どうだろう。あんまり意味ないと思うけど」

小柄なアベドは、一步近づいた。

「見習いを『顔寄せ亭』に入れたのも、あんたを嗅ぎまわってる〈野^の駆^かけ〉の指示？」

「いいや、私の判断だ。あいつは勝手に私の周りをうろついているだけだ。……」

まあ、あんたもそうみたいだが」

ドナウトは、小柄なアベドから目を離さず、柵の引き出しから、慣れた手つきで火打ち箱を探り出し、燭台に火をつけた。

「へえ。見習いを守るなんて。あんたはそんなことしないと思ってたけど。まあいいや。で、珍しく期日前に約束場所に来て、なにをするつもりかな？」『資料』、どっかにやろうとか考えてる？」

ドナウトは、明かりに浮かび上がったアベドの姿に、目を細めた。

「ふむ。知らない顔だな。すまんが、そういう話は、君とはしていないはずだが」「なあ、あんまり時間稼ごうとしないでよ。あんた、私が〈目〉だって、とっくにわかっているでしょう？」

ドナウトは、ちょっと目を大きくした。

「そうか！ 君が？〈目〉っていうのは、もっと豪傑なアベドかと思っていたよ。君は、まるで子どもみたいだな」

〈目〉——タアラは、調理台へ向かう師の人を睨みつけた。

「もっとまじな演技をしたらどうだよ。死にたいの？」

ドナウトは、調理台下の柵から、サリヤ酒という麦の蒸留酒瓶を取った。

「渡してやるから、ちょっと待て。疲れてるんだ。一杯飲ませてくれ……」



自然の人たちは、つばを飲み込んだ。魔導師ノウアは、赤々と燃える瓶を手に、
〈見えない死〉に侵された畑へ近づいた。

自然の人たちは、それ以上近づけなかった。何人がうめき声をもらし、後方へ退散した。

ヨウスは、雪の積もって真っ平になった灰色の畑を凝視しながら、仲間のダンタラーケの肩を叩いた。

「イエリオットの呪いなのかもしれないな」

ほつり、ヨウスは言った。「信じてやらなかった。だから怒っているんだ。かまってちゃんのあいつは、死んでもかまってちゃんなのかもしれん」

ダンタラーケは、無言で〈精製炎〉の光を見つめた。

魔導師の傍に立っているのは、クレアナダ長だけだった。長は、希望の炎を、息をつめて見つめた。

「不思議な炎。閉じ込められているのに、延々と燃え続けている……」

「〈虹の猫〉の涙の他に、影の人はもう一つ、あたしに助けをくれました。……手に入りにくい灯火蟬が、ちょうど魔導師の木の在庫にあったのです。灯火蟬の名はご存じで？」

「ええ。西のアスハリエテイク国に生息する虫ですね。食用として食べられて

いる」

「アスハリエティク国で食べられるのは、成虫になったばかりの若い蟬ですが、使ったのは、発情期を過ぎて、死を待つのみとなった雄の蟬です。灯火蟬ナッククイカの雄は、交尾を終えると、すぐに死の準備に入ります。灯火蟬ナッククイカの死は、体内で生成された油分が酸化し、自然発火を起こして、自分も燃えて死ぬというもので、別名『死を呼ぶ油』とも呼ばれているのです」

「その油と、〈虹ヤクナナラの猫

〉の涙が、〈精製炎せいせいえん〉の正体なのです。」「ヨウスが焔を燃やしたことを参考に、より浄化力のある強い炎を作りたかったのです。『死を呼ぶ油』ともいいますが、魔導師の間では、生命を呼ぶ油とも言うのですよ。死の炎のあとは、生が芽吹くってね」

老魔導師は、途絶えることのない舞雪を見つめた。そして、その中へ、〈精製炎せいせいえん〉を放りあげた。それは、星のように闇で輝き、ある一点でとまった。

地上の者たちは、息を呑んだ。

大きな鼻が、鉤爪で〈精製炎せいせいえん〉をにぎっていた。鼻は、焔の中心部へ向かうと……ぱつと落とす。

流星のごとく一直線、その軌跡を追った直後、焔は猛火に包まれた。まるで、けだもののように、炎は、その真っ赤な舌で、焔を嘗め尽くした。漆黒の冷たい空にも、真紅の炎は手を伸ばしていく。何度も何度も。その光景は、こちらを震

え上がらせるほどの、脅威と美しさを持っていた。

ばりばりと咀嚼音に似た音が、雪の中で響いた。これに、クレアナダ長おさと魔導師ノウアは、ほっと力を抜いた。

「あれは、呪いを壊す音でしたね」クレアナダ長おさが言った。

「ああ。これでもう、〈見えない死〉のほうは終わっただろう。もし他の地に広がっても、〈精製炎せいせいえん〉で燃やせばいいとわかったし。……材料が希少なのが心苦しいがな！」

「早いうちに脇芽をとってよかったと思っています。本当に、心から」

クレアナダ長おさは、首巻の中で頷いた。

背後で、ヨウスを含む自然の人たちが、勝利の声を上げていた。冷気が冴える夜だったが、彼らは頬を上気させた。もっと見ようと、畑へ近づく。もう、悪寒や吐き気はすっかり消えて、忘れ去られていた。

クレアナダ長おさと魔導師ノウアは、だが、この赤々と燃える地を耕していた、イリオットのことを忘れられなかった。



硝子のホルトに、薄ら寒い色をしたサリヤ酒が注がれた。

ドナウトは、煽って飲んだ。手が震える。再びサリヤ酒を注ぐ。

タアラは、苛立った。懐からなにかを取り出す。

短刀だ。

刀は、なめらかに光を放った。

「酔ってとぼけたいわけ？」タアラは低く訊ねた。

「少しの休息も待てないのか？」

ドナウトは、音を立てて酒瓶を置いた。

「……………それは、結構なことだっ！」

瞬間、ドナウトの手からホルトが飛び、交差させた〈目〉の腕にぶち当たった。

「このじじいっ！」

タアラの叫びをドナウトは聞いていなかった。彼は、部屋中にサリヤ酒をまき散らした。

タアラは、ドナウトに突進した。

しかし、ドナウトに燭台を顔先に突き出され、タアラは半歩下がった。

「『顔寄せ亭』に見習いを入れられては、君ら〈緑の巨人〉は、手も足も出ない

だろう、え？」

ドナウトは詰め寄った。

「何たってあそこは、〈緑の巨人〉を取り締まる団体の、隠れ家だそうからな」

荒い息をつきながら、ドナウトは瓶を放り捨てた。

タアラは喋ろうとしたが、かぶったサリヤ酒が口に入り、刺すような痛みが舌と喉を焼いた。

「……はっ！ そっちに、回ったのか？」タアラは咳き込みながら言った。「だが、永遠に見習いを閉じ込めておくことはできないだろ」

「そうだな。だが、私はここで、終わりにすることにしたのだ。言うておくが、あんたらが見習いを殺そうというなら、殺せばいい。そうやって、イエリオットや他の動じない者のように、何百人も殺すがいいさ。だが、どれだけ殺そうが、あの『資料』は、お前たちの手には渡らん」

「はあ、見上げたもんだね。じゃあ、あのま抜けな料理人に渡したっての？ それとも、王家の犬に？」

「いいや。プエツアーにも〈野駈け〉にも渡しとらん。誰も、あれを手にするとはできん。私にも不可能だ。……もう、二度とな」

次の瞬間、ドナウトの持っていた燭台が落ちた。タアラははっとしたが、すべて遅かった。

火は、撒かれたサリヤ酒を伝って広がり、酒をかぶったタアラの外套にも燃え移った。

タアラは、喚いて外套を脱ぎ捨てた。ひしゃげた帽子にも火がうつる。「ああ

あつ、やめろ！ 大事なのに！」叩いてかぶり直すや、タアラは、火の海に超然と立つドナウトに飛びかかった。

「じじい、どういいうつもりだ！ 協力すると言ったのに！」

「殺しに協力するとは言っていない！ 別の仕事人になれると約束したのは、あんたたちだ。だが、あんたたちが約束を破った。どうだね。これでお互い様だろうが？」

タアラは、ドナウトの胸ぐらを握り上げた。その目は、ぎらりと必死に輝いた。

「他の仕事人になるために、光シスルアの民を倒す。影の人を倒す。あんた、それに賛同したから、アケラス竜の甦生を提案したんだろっ。『資料』は――『デイゴンネー竜古書』は、もうあんたの研究じゃないんだよ！ あたしたちの希望なんだ！」

「竜を蘇らせることなど、不可能だと知ったのだ！ 試しにアベドを一人蘇らせた結果がどうだ？ 自然の村の一部が死んだ！ お前たち〈緑の巨人〉が、〈見えない死〉を作り上げたのだ！ 反逆したイエリオットの口も封じてしまった。アケラス竜を蘇らせてもみる。いまも竜のために力を抜かれている空は、やがて均衡が崩れ、災厄を起こすだろう。島も民もすべて死ぬ。別の仕事人になったとしても、そんな世界に私は住みたくもないわ！」

ドナウトは、胸ぐらにくつつく〈目〉の手を掴んだ。

「……それに、お前だって、その帽子のせいで鼻と目がだめになっているじゃな

いか。いいかげん、目を覚ませ！」

だがタアラは、すぐさま彼の鳩尾に一発くらわした。ドナウトは息がつまり、火の海に崩れ落ちた。

「……魔導師も、光シスルアの民も、なぜあたしらのことが見えてないのか、わかる？ それはね、見ていないからだよ。見ようともしていない。やつらが見ているのは、影の人、そして影の人を崇拜するアベドだけだ。あんたもそれが嫌だったはず。あたしたちは、それを変えるためにアケラスの竜を起こすことにしたんでしよう？ あんた、いつからそんな盲目になったの？」

周りを取り巻く炎は、書棚を焦がし、中で逃げられないでいる本の背を焼き、椅子の座面を、絨毯を、壁を、すべてをその手に取り、黒く染めて、崩していった。

タアラは、煙の中で書棚を睨み上げた。そして悟った。もともとここには、サリヤ酒がかけられていたのだと。この素早い火のまわりが、その証拠だった。

タアラは、舌打ちして、鼻をこすった。匂いを嗅ぎ取れなかった。

タアラは雄たけびを上げた。炎がタアラの周りを取り巻く。抱くように、笑うように、または、怒りを代弁するかのよう。

そんな〈目〉を、ドナウトは、床で咳きこみながら見つめた。気がつけば、〈目〉はどこにもいなくなっていた。

意識が朦朧としはじめる。世界が、闇の向こうへ遠のいていく。

ドナウトは、わずかに笑みをたたえながら、真っ赤な炎に目を閉じた。